橦木館日和

しゅもくかんびより◆第十五号

文化のみち橦木館（しゅもくかん）
Cultural Path Shumokukan

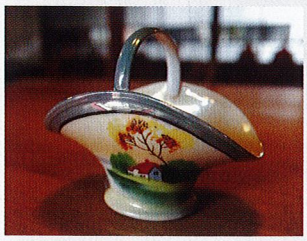
発行日：2017年3月30日
発行：文化のみち橦木館
指定管理者：特定非営利活動法人橦木倶楽部

チカラマチから アメリカへ

～名古屋市東区生まれのオールドノリタケ～

文化のみち橦木館の建築主であった井元為三郎は明治30年（1897）東区飯田町に井元商店を創立し、陶磁器貿易商として活躍した。その前年、明治29年（1896）頃に森村組（ノリタケ、TOTO、日本ガイシ等、森村グループの前身）が、美濃や瀬戸からの陶磁器生地の荷受けや堀川を使った運送などの立地条件が橦木町（しゅもくちょう）一帯の武家屋敷跡（現主税町公園あたり）に、画付け工場を集約し大規模な工場を建設した。これが名古屋市東区の輸出陶磁器産業の繁栄のきっかけをつくった。

掲載の手書きケーキ皿やバスケット（※写真）は、橦木館洋館2階展示室でご覧いただけます。



昭和初期に森村組画付け工場で使われた裏印 “CHIKARAMACHI”

欄間の目線

NPO法人橦木倶楽部理事長　伊藤喜雄

武家などの座敷の間仕切りに襖や障子が取り付けられると、全体に風通しや採光が悪くなったため、天井と鴨居の間を明けて通風や明かり取りとし、後に鴨居上に結界欄間（竹節欄間）を設けた。更に格子や桟、筋交、襷（たすき）を取り付けた「欄間」の原型が出来たと考えられる。桃山時代には、欄間は装飾性が高くなり、城の殿舎や寺社の書院、門などの欄間には透彫や彫物（彫刻）の欄間が取り付けられた。

江戸時代、慶長期の書院造には、極彩色金張りの襖絵が描かれるようになるが、欄間は実用的な型を残した質素な筬欄間（おさらんま）だった。筬欄間の上に極彩色の彫刻を取り付けられるようになり、寛永期以降、欄間は桃山風の装飾性の高い極彩色、金張の彫物欄間となった。

数寄屋造や庶民文化とも合わさり欄間に明障子や無双（夢想）、透、彫物、自然木、襷、華などを付けたり、欄間部を小壁にして意匠的な穴をあけた。その他、意匠化した多種の欄間も造られ、書院などの室内だけでなく、門や塀、玄関、車寄などにも取り付けられた。

明治以降、欧米の洋建築が日本建築に取り込まれ、ガラスが普及した。それに伴い、洋館にも和室にもガラス欄間が付けられるようになった。また、ガラス欄間もステンドグラスで彩られるようになった。当時の日本の洋館では、欄間のように、先人が考案した日本文化の装飾などを、洋風にアレンジし、さりげなくとりこんでいる。

【ステンドグラスの欄間】

★橦木館「青い鳥のステンドグラス・ラブストーリー」

昭和2年（1927）より建てた橦木館洋館のエントランスホールの半円欄間ステンドグラスは、欧米の幸福の象徴「青い鳥」と銀杏がデザインされている。エントランスホールの番（つがい）の青い鳥は背を向けているが、併設する「橦木館カフェ」のサンテラス出入口上の欄間の青い鳥はクチバシを合わせ、体がほんのりピンクに染まっている。恋をすれば美しくなるということでしょうか。コーヒーも恋を芽生えさせる飲み物といわれている。エントランスホールの青い鳥を見た後、橦木館カフェでコーヒーをいただき、カフェのサンテラスの青い鳥を見上げた時には恋が成就すると言う橦木館は「恋のホットスポット」といえるのかも知れない。恋愛成就を願う方は橦木館に足を運んでいただくのもいいかもしれない。

「青い鳥」（洋館1階／橦木館カフェ　サンテラス出入口上部）

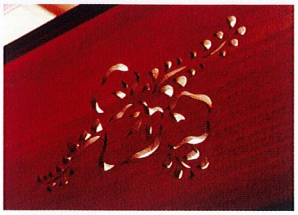
「青い鳥」（洋館1階／エントランスホール）

【橦木館　和館の欄間】

和館の欄間は大正から昭和初期に流行した「桐の透欄間」で、居間（和室2）は「鶴の舞と松」の透彫だ。松は吉祥の樹木「松竹梅」の一番で、長寿や若さ、繁栄を表している。鶴と亀は共に長寿の象徴であり、仙禽・仙客（せんきん・せんかく）などの別名がある。舞いは求愛の舞いだろうか。客間（和室1）の透欄間は「青桐に鳳凰」の透彫だ。台風の化身と言われる霊鳥の鳳凰は中国の伝説上の鳥で、青桐だけに止まり、竹の実だけを食べ吉祥をもたらす。鳳凰が姿をあらわす時は聖天子があらわれると言う。鳳凰は、「麒麟・亀・龍」と共に瑞獣の「四霊」とされ、平安を表す。

「鶴の舞」（居間／和室2）

「鳳凰」（客間／和室1）



「青桐」（客間／和室1）

青桐は奈良時代に日本に伝わり、豊穣や幸運を呼び、平安時代には天皇家の「印（しるし）」として用いられた。桐紋を下賜された足利将軍一門や将軍より与えられた織田信長も青桐を家紋としており、豊臣秀吉の五七の桐紋、太閤桐は有名だ。桐紋は現在でも「日本の印」として使われる。橦木館の欄間の各所には、幸福や豊かさ、平和、求愛などを表す動植物がふんだんに使われており、「ハッピードリームハウス」とでも言えるのかもしれない。

樟木館の鳥達と名古屋コーチンのお話

平成29年、酉年（とりどし）。樟木館の欄間には、「平安や幸福」を運ぶ鳥達（青い鳥・鶴・鳳凰）が複数おり、樟木館の庭園にも野鳥が羽を休ませに来る。

樟木館の建築主である井元為三郎が米国ロサンゼルスで「駝鳥（だちょう）」に乗っている写真は印象的である。（樟木館に写真を展示）。

皆様も鳥が集まる樟木館を訪れて頂ければ、きっと「良い年」になるでしょう。

ちなみに、名古屋名物の鳥と言えば「名古屋コーチン（名古屋種）」だろう。

名古屋の地鳥と各国の地鳥などを掛け合わせ改良し、名古屋コーチンを作った海部荘平と弟の正秀が住んでいた海部屋敷跡は樟木館の真南（現山吹小学校の敷地）になる。ちなみに、海部氏は愛知県で二人目の総理大臣海部俊樹氏と同族で、俊樹氏の曾祖父海部久蔵の屋敷は朝日文左衛門屋敷（現主税町の太閤本店）だった。

海部屋敷跡（現 名古屋市立山吹小学校敷地）

平成28年度 催し物暦（9月～3月）

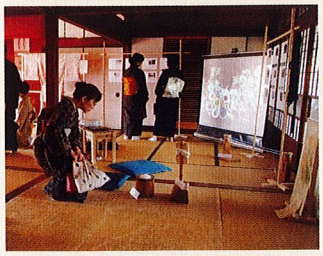
9／15～9／25
山・ときめきの瞬 写真展

10／8～10／30
伊勢型紙で彫る 文様の世界

11／3
11月3日「歩こう！文化のみち2016」

11／16～11／30
名古屋近代建築今昔

3／17～3／26
織りと染め～布と色を楽しむ



文化のみち樟木館では、館主催イベントをはじめ、貸室利用によるイベントを年間通しておこなっています。当館では和室・洋室・茶室・蔵・庭をお貸しします。詳しくは下記の電話番号、ファックス番号へお問い合わせいただくかホームページをご覧ください。

TEL:052-939-2850　FAX:052-939-2851　http://www.shumokukan.city.nagoya.jp